

「みさと学」とは～ふるさとを知り、
自らをみつめ、自らの生き方を考える学習～

本町では、学校教育の柱として「みさと学」を推進しています。これは“ふるさと教育”と“キャリア教育”を融合したものです。しかし、単に二つをつなげただけというイメージではなく、9年間を通して“ふるさと教育”を基盤にして、自らをみつめ、自らの生き方を考えるという学習です。

それを具現化するために、まず目的を明確にしました。この学びは、人間教育の基礎を築くためのものであり、自分自身の生き方を考える教育です。その目的を達成するためには、小中学校で一貫して学び続けることが大切であり、それが「みさと学」を推進していく重要な要素であると考えています。

小中学校では、地域探検や史跡見学などの“ふるさと教育”が盛んに行われています。その際、子どもたちが、それらを実際に見て触れることで、「へえ、町にはこんなものがあったんだ」「こんな歴史があったんだ」と感心すると思います。ただ、それだけにとどまらず、もう少し掘り下げて、「なぜここにこれがあるの?」「これが町の発展にどう影響したの?」などの疑問をもち、さらに調べてみようという気持ちになるような学習にしたいのです。それは探求的な学習であり、その結果、自らの生き方を考える教育になっていくことをめざしています。

つまり、子どもたちの興味関心を喚起し、自らそのことを調べたり、尋ねたりするような探求的な姿勢が生まれることで、その後に経験する職場体験等のキャリア教育にも、よい影響を与えると考えています。

「みさと学」は、単に愛郷心を育む学習にとどま

らず、自らの生き方を考える学習です。そのような学習にするためには、“ふるさとを愛する心”の押し付けにならないよう、あくまでも子どもたち自身の主体的な学びが大事だと考えています。

人は、生まれ育った地域の影響を受けて育ちます。その地域を知り、考えるのが“ふるさと教育”だとすると、例えば外国を含む他地域から転入してきた場合はどうなるのでしょうか。その子どもたちには別のふるさとがあるではないのかという疑問が生まれます。それに対する答えは、次のとおりです。

今、通学しているこの地域のことを知り、探求することで、地域に対する関心が高まれば、自分の生まれ育った故郷にも、きっと歴史があり素晴らしいものがあるに違いないと思いを馳せるようになるのではないのでしょうか。そういう思いを礎にして、自分の生き方を考えるようになるはずです。

「みさと学」の目標には、“将来、市川三郷町を支えていく子どもを育む”ことを掲げていますが、“町を支える”ということはどういうことでしょうか。必ずしもこの土地に住むことだけが“町を支える”ことではないと思います。たとえ将来、本町を離れたとしても、この学習が礎となって、心の中に町への“思い”があれば、将来、本町のために貢献しようと思う人になってくれるのではないのでしょうか。それが大事だと思っています。

この目標を達成するためには、教師の力が不可欠です。どうしたら子どもたちに興味関心をもってもらえるのか、どうしたら探求心を培えるのか、これらを考えながら指導する必要があります。押し付けの教育はよくありません。本人がやる気にならなければなりません。先生方がこのことを理解し、指導を工夫することが非常に大切になってきます。

さらに、子どもたちの教育は、義務教育の9年間だけでは完結しません。小学校に上がる前の教育として幼保との連携も重要ですし、中学校を卒業してからの高等学校等との連携も重要です。そこで「みさと学」では、幼保小連携、中高連携にも力を入れています。

例えば毎年、本町の公立私立すべての保育所園・認定こども園の所長さん園長さんをはじめ担当職員に参加していただく中で、幼保小連携の学習会を、すべての小学校の校長や担当教職員とともに開催しています。この点、県の教育委員会にも高く評価していただいています。

また、中学校の職場体験では、町の商工会の全面的な支援と協力を得て、町内の多くの事業所を訪れて、有意義な学習が行われています。そこでは、「仕事とは何か」「仕事で大切なことは何か」という根本的な問いを学習の柱として、単に「仕事を体験すること」から、「仕事は何のためにするのかを学ぶということ」にシフトすることで、学習がより深まるようになりました。

その結果、当初から活用している OPP (1枚ポートフォリオ) シートによると、ほとんどの生徒が、体験前は仕事について「お金をかせぐため」「生活のため」というようなイメージをもっていたのが、体験後には「人のため」「コミュニケーションを大切にすることが大切」などの感想に変わりました。学ぶとはこういうことだと、改めて感じることでできる実践になっています。

このように、職場体験等の成果をあげるためには、地域との連携が欠かせません。そのため、これらの活動には、各中学校区ごとに設置している“地域学校協働本部”の推進員、とりわけ統括推進員の役割

が非常に大きくかかわっています。地域と学校とをつなぐキーマンがいることで、「みさと学」をより効果的に推進することができています。

これら以外にも、「みさと学」には地域との関連の中で、多様な学習があります。例えば、子どもたちの安全教育、とりわけ町の総合防災訓練への小中学生の参加や、地域住民や教員 OB による授業や諸活動への援助、企業見学の折に子どもたちのアイデアの提案、「みさと学」の学習成果を踏まえての町長への提言等々、多岐にわたります。これらの活動すべてが、「みさと学」の目的に向かっていくことで、子どもたちの真の学力が向上していくと考えています。

そして、「みさと学」において、当初から掲げているポイントは「教育課程の系統性」と「主体的学習」です。その上に立って、今年は「調べ学習的な活動から探求的な活動への進展」と「学校間の交流」をキーワードとしています。

「みさと学」を通して、自ら考え行動する子どもたちを育てるため、先生方の意図的、積極的な指導を大いに期待しています。それが、子どもたちのかけがえのない輝ける未来につながっていくと信じています。

(市川三郷町教育長 渡 井 渡)

